

第二百十九話 大東亜戦争とインド（国家戦略の不備）

最近、日米豪印のクアッドが注目を浴びている。同様に大東亜戦争でもインドの戦略的価値は極めて高かったにも拘らず、日本はそれを十分に活かすことが出来なかった。歴史とifは相容れないのは当然だが、もう少しやりようがなかったのかと悔やまれるのも事実だ。

1 インドの戦略的価値



インドは、シンガポールと共に、英国の東洋における重要拠点であり、新鋭戦艦二隻を擁する英国東洋艦隊はそのシンボルであった。欧州と東亜を接続する要域であり、日独が連携するために不可欠の地でもあった。また、蒋介石政権支援物資の輸送ルートの入り口ベンガル湾を抑え、且つ支那大陸包囲網の西翼を担う。英連邦の二大拠点印と豪を分断しうる。インドでは反英運動・独立運動が起きており、国民会議派のガンディやチャンドラ・ボースの運動が活発化した。尚、第二次世界大戦の間に、英印軍は250万人を超え志願兵のみからなる軍隊では歴史上最大の軍隊となったと云う。

2 戦略性なきインド作戦

「対米英蘭戦争終末促進に関する腹案」（1941/11/15 大本営政府連絡会議決定）において、“独伊との連携により英国を屈服させ、米国の継戦意思を喪失させる”としたインド洋・西アフリカ作戦であったが、残念ながら戦略性がなかったと断ぜざるを得ない。

(1) インドに関連する日本の作戦等

- ・海軍のインド洋作戦（第一段第四期作戦）（1942/3/9～4/13）
- ・陸軍のインパール作戦（1944年3月～7月上旬）
- ・特務機関の活動（インド独立等に関係する）（F機関、光機関、岩畔機関）
- ・チャンドラ・ボースの帰還（1943/4 マダガスカル島沖 独のUボートから日本海軍の潜水艦に移乗）

(2) 問題は何か

陸海軍の作戦に連携がない。対インドの戦略目的が確立していないので、陸・海軍の統合作戦も出来ない。インド国民軍と共に、陸海軍がインド上陸作戦を敢行しておれば、英国はギブアップした可能性もある。独のアフリカ作戦とタイアップ出来ていたならば、戦局はかなり異なっただろう。

海軍が、セイロン沖海戦（1942/4/5～9）の戦果を拡張することなく太平洋正面に戦力転用したのは残念だ。蛇足ではあるが、独・伊は日本艦隊のインド洋作戦継続を強く要請した。陸軍が、インパールに拘ったのも、理解できない。援蒋ルート of 遮断が作戦目的であるならば、アラカン山脈越えではなく、海軍の支援を受けてインド国民軍と共同インド上陸作戦を敢行する方策があったのではないか？南方作戦が不徹底だった。既に東洋艦隊が撃破され、セイロン沖で残存艦隊も手痛い打撃を受け、インドから英軍部隊が駆逐されたならば、強気のチャーチルも手を挙げざるを得なかったのではないか？米国は切歯扼腕しつつも、為す術なしだった筈だ。

独滞在中のチャンドラ・ボースを開戦前に、インド若しくは日本に帰還させ、より密接な連携を施していたならば、インド国民軍の戦力強化も進捗しただろう。

- #### (3) 「腹案」の決定が開戦直前であり、ある意味では止むを得なかったとも云えるが、腹案に基づく陸海軍統合の作戦計画がなく、バラバラになった感がある。（1）項に列挙した4項目が密接に連携されねばならない。残念ながら、外交と陸軍、海軍の認識・意思統一もなく、国家戦略の欠如・不備と云わねばならない。

(了)